

①

ネジバナ

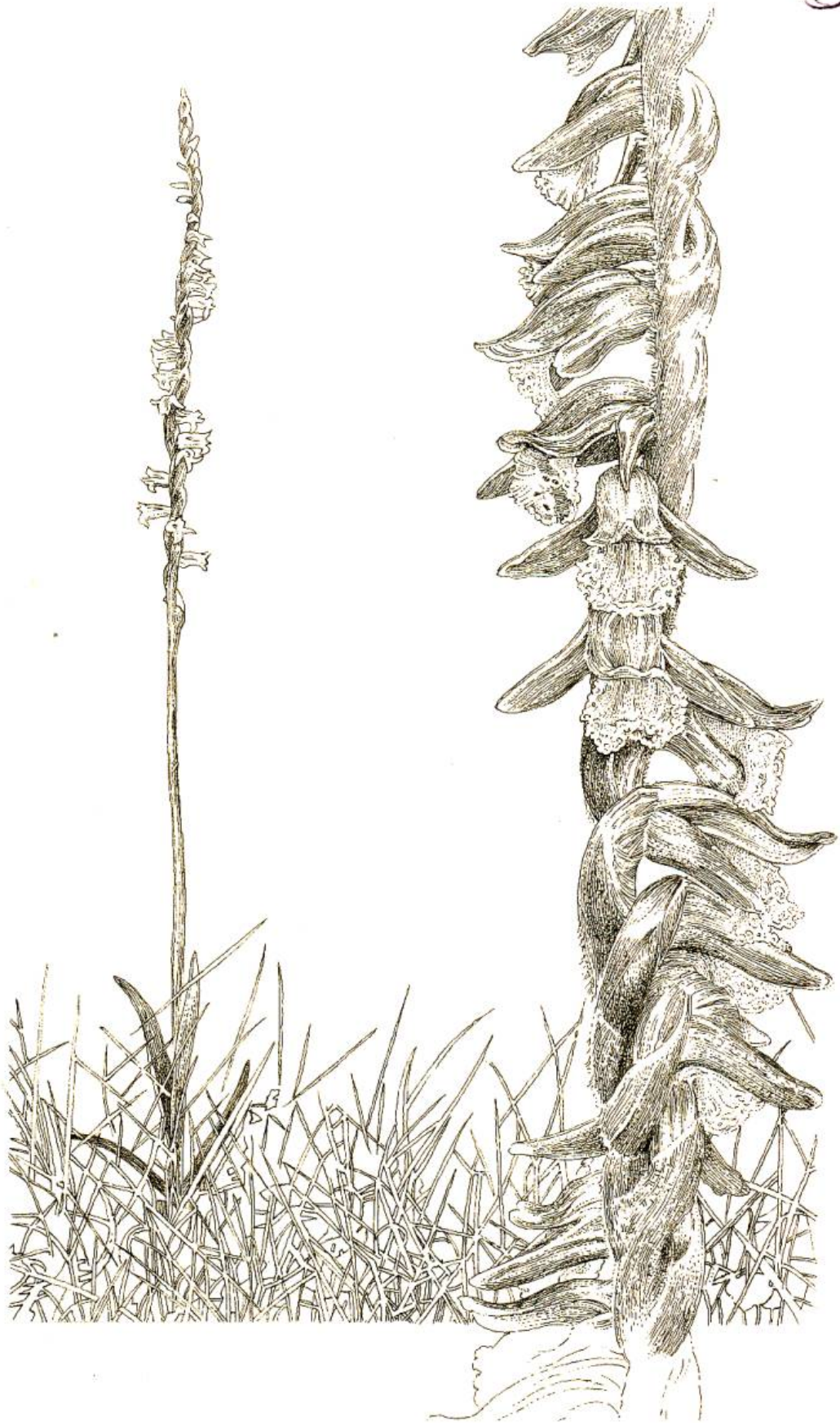
捩花ねじばな

ラン科

ひねくれもののねじれた戦略

植物のつる(蔓)^{つる}の巻き方は、種類によって左巻きか右巻きかが決まっている。たとえば、アサガオのつるは右巻きである。ところが、本によっては左巻きと書いてあることもある。何ともややこしいことだが、これはどちらも間違いではない。上から見ると、アサガオのつるは支柱に対して反時計まわりに巻いていく。すなわち左巻きである。ところが、これは人間側から見た場合である。アサガオの立場に立って根元から上を見上げてみると、逆に時計まわりになる。これは右巻きである。何ともひねくれた見方にも思えるが、植物以外の分野では、むしろこの方が一般的である。ネジはアサガオのつると同じ巻き方だが、進行方向に対して右に回すと前に進むので右巻きである。最近では、植物も伸長方向に対して見るほうが一般的だから、この見方ならばアサガオは右巻きになる。といっても、つるの巻き方を伸長方向で考えるのは慣れないと難しい。茎の伸びる方向に親指を向けて、右手で握った指の巻き方と同じであれば、右巻きのつる。逆に左手で握って同じであれば左巻きのつると覚えておくといいたろう。

2



ネジバナは、その名のとおり、ネジのように花がらせん状に巻きながら咲いていく。虫が訪れやすいように横向きに花を咲かせるので、一方向だけに花をたくさんつけると傾いてしまう。だから、満遍なく周囲に花をつけてバランスを保っているのである。

ネジは右巻きだが、このネジバナには右巻きと左巻きの両方がある。この巻き方も植物のつると同じ方法で判断できる。調べてみると、場所にもよるが、右巻きと左巻きはおおよそ同じくらいの割合である。余談だが、ソフトクリーム屋の店頭にある大きなソフトクリームにも右巻き、左巻きの両方がある。ネジバナのついでに調べてみたら、これも同じくらいの割合だった。

ネジバナは芝生などに生える雑草だが、ピンク色の花がかわいらしいので刈られずに残されている光景によく出会う。美しいこともサバイバル戦の武器になるのだ。花は美しいはずで、ネジバナは小さな雑草ながらランの仲間なのである。ランの仲間はどれも美しく複雑な花の形をしているが、ネジバナも負けてはいない。白いレースのような花びらが下に一枚つき出ている、それにかぶさるようにピンク色の花びらがかぶと、のように重なっている。小さな花ながら、虫眼鏡でのぞくとなかなか美しい。

この上側の花びらに雄しべと雌しべが重なっている。雄しべの先端には接着剤のついた花粉の塊が用意されている。この花粉の大きな塊を虫につけてしまうのである。虫が

別の花を訪れたとき、雌しべの先はさらに粘る鳥もちのようになっていて、接着剤で虫についた花粉の塊をちぎりとってしまう。小さな花粉をやりとりせず、お徳用パックで売買するように一度に受粉をすませてしまうのだ。ネジバナは種子の数がものすごく多く、一つの小さな花が数十万個もの種子を作る。ばらばらの花粉で受粉してはとても大変なので、まとめて受粉してしまうのである。

それだけたくさんの種子を作るので、一粒当たりの種子のサイズはとてつもなく小さい。微細な種子はあたかもほこりのように風に舞って散布されていく。ところが、問題がある。ネジバナの種子はあまりにも小さいので、発芽に必要な栄養分さえ持ち合わせしていないのだ。そこでネジバナの種子は恐るべき戦略を考え出した。

ネジバナの種子はラン菌というカビの仲間を呼び寄せ、驚くことに自らの体に寄生させてしまうのである。そして種子のなかに入りこんだ菌糸から逆に栄養分を吸収して発芽する。さらにはラン菌を分解して完全に吸収して生長の栄養分にしてしまう。一歩間違えば逆に菌に侵されてしまう。まさに「肉を切らせて骨を断つ」ぎりぎりの作戦である。不意を突かれたラン菌にとっては、甘い誘いに誘われてキャッチセールスにでもあったような思いだろう。見かけのかわいらしさにだまされてはいけない。ネジバナの根性は相当ねじ曲がっているのだ。

ネジバナ *Spiranthes sinensis* var. *amoena* (ラン科 ネジバナ属)

ネジバナはモジズリとも呼ばれ、北海道から九州、樺太・千島・朝鮮・中国・ヒマラヤに分布する多年草。芝生などの草丈の低い、明るい草地に生育する。乾燥した場所から湿地にまで生育するが、芝生に生育する場合には粘土分を多く含む場所に良く生育するようである。葉は数枚で地面から立ち上がり、芝生では長さ5cm前後であることが多いが、湿地では10cmを越えることもある。やや厚めの葉であり、刈り取りや踏みつけにも耐えるのであろう。

花は5月頃から咲き始め、秋にも開花したのが見られる。花茎は20cm前後であることが多いが、30cmを越えることもある。花茎には螺旋状に小さな花が付き、巻き方が反対のものもある。花の色は淡紅色であるが、濃いものから薄いものまで、多様である。





花をらせん状につけるなんて、信じられません！まるで、おとぎ話にでも出てきそうな「空想の植物」のようです。らせん状の理由は「どこから見ても花が見えるように」だとか、「まっすぐ立ち上がるためにバランスをとっている」だとか、聞いたことがあります。何かもっと深い意味がありそう……。

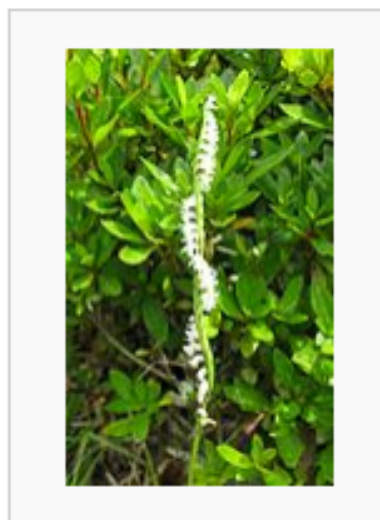
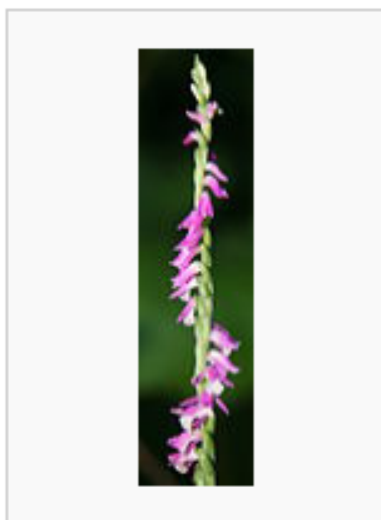
名前	ネジバナ(モジズリ)
科名	ラン科
学名	<i>Spiranthes sinensis</i> (Pers.) <i>Ames</i> var. <i>amoena</i> (M. Bieberson) Hara
花期	夏
<p>くきはまっすぐに立ち上がり、10～40cmになります。</p> <p>ピンク色の花がくきをまきついて登るよう(らせん状)につくのが特徴です。このような花のつき方をする野草は、日本ではほかにないそうです。</p> <p>葉は細長く、先がとがります。</p>	
名前のいわれ	花がくきに「ねじれて」つく様子から。

特徴 [編集]

湿っていて日当たりの良い、背の低い草地に良く生育する。花色は通常桃色で、小さな花を多数細長い花茎に密着させるようにつけるが、その花が花茎の周りに螺旋状に並んで咲く「ねじれた花序」が和名の由来である^[1]。「ネジレバナ」、「ネジリバナ」、「ねじり草(そう)」とも呼ばれる事もある。学名の *Spiranthes*(スピランセス)は、ギリシャ語の「speira(螺旋(らせん)) + anthos(花)」に由来する。右巻きと左巻きの両方があり、中には花序がねじれない個体や、途中でねじれ方が変わる個体もある。^[2]。右巻きと左巻きの比率は大体1対1である^{[3][4]}。

花茎から伸びる子房は緑色で、茎に沿って上に伸び、その先端につく花は真横に向かって咲く。花茎の高さは10-40 cm^[5]。花は小さく、5弁がピンク、唇弁が白。花のつく位置が茎の周りに螺旋状であるため、花茎の周りにピンクの花が螺旋階段のように並ぶことになる。この螺旋は右巻きと左巻きの両方が見られる^[6]。白花や緑色の個体もしばしば見られる。コハナバチのような小形のハナバチなどが花粉塊を運んで他花受粉が起こると考えられるが、長期にわたって花粉塊が運び去られないと、これが崩壊して柱頭に降りかかり、自家受粉を成立させることが知られている。開花時期は4-9月^[1]。

葉は柔らかく厚みがあり、根出状に数枚つける。冬期は楕円形だが生育期間中は細長く伸びる。根は極めて太短く、細めのサツマイモのような形で数本しかない。ごく稀に黒ジバナ、シロバナモジズリ)が見られ、園芸愛好家に特に好まれる^[6]。



ねじれた花序のネジバナ シロバナモジズリ
ナ



ネジバナ<痾花> ラン科 ネジバナ属 *Spiranthes sinensis* var. *amoena*

低地の草地に見られる多年草。高さ20cm程度。初夏に開花。花のねじれ方は千差万別で、ねじれがほとんどない個体からねじれの大きな個体まである。別名モジズリ。

分布 日本全土

花期 5-8月

撮影 佐賀県 04. 7. 11、長崎県三和町 03. 7. 6









